

高齢者の医療費と生活構造(第1報)—医療費の実態—

お茶の水女大家政 伊藤秋子 国民生活センター 磯村浩子 井立女子短
大の馬場紀子 千葉大教育 宮本みち子 東京家政学院短大 福田協子

目的 近年 老人医療費の増加が著しいが、医療費の増加が、高齢者の健康の向上に直ちに結びつくものがあるかどうかは、必ずしも明らかにされてはこなかった。高齢者の健康が生活の実現に必要とされる条件を明らかにするためには、医療費の量的側面だけでなく、医療費とそれに対応する生活構造の関係をみる必要がある。本研究は、この点に着目し、高齢者の医療費の実態と生活構造の関連を、実証分析により明らかにしようとしたものである。第1報は、高齢者の医療費の実態を、受診状況からとらえる。

方法 静岡県掛川市の高齢者(昭和55年度 67歳~74歳)を対象とし、昭和53年度~55年度の3年間の受診状況(受診件数、日数、点数、特別控除の有無、疾病名、入院・外来の有無)を、国民健康保険レセプトから抜き出した。更に、昭和57年3月に、生活実態調査を実施し、この2つの調査結果から、高齢者の医療費と、それに関係すると思われる生活内容や意識との関連を解析した。分析対象者は、381名である。

結果 1)年間平均受診点数は、53年度 8,596点(1点は10円) 54年度 10,596点 55年度 11,340点である。2)外来点数は、年齢が高いほど大きい。また3年間の点数の推移を年齢別にみると、増加率は年齢が高くなるほど大きくなる。3)55年度に受診ゼロの者は全体の10.2%存在しており、67~72歳までは、大きな差がみられない。また、1万点以上の高医療費の者は、34.9%を占めている。この割合は、年齢が高いほど大きい。(73,74歳では50%) 4)年間点数3万点以上と著しく高医療費の者は、6.3%を占めるが、その多くが、入院によるものである。5)点数の大小は、疾病の種類とかがわち、こいる。